

## 小学校英語担当教員養成の取り組み<sup>†</sup>

### — 「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」 2年目を終えての成果と課題—

若 彦 保彦・佐々木雅子・パターソン エイドリアン

佐々木和貴・村上 東・星 宏人\*

秋田大学教育文化学部

本稿は、文部科学省が行っている「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」に関して、平成29年度に秋田大学が同省からの指定を受けて実施した、(1)小学校の現職教員が中学校教諭免許状（外国語（英語））を取得するための免許法認定講習等の開発・実施、(2)小学校現職教員が次期学習指導要領に即した新たな指導方法等を加えた専科指導に対応できるプログラムの開発及び講習の実施、の2つの事業のうち、英語に関する講習における取り組みやそのねらい、成果や今後に向けた課題について、2年目の平成29年度に講習を担当した教員の報告をまとめたものである。

キーワード：小学校、英語、教員養成、プログラム開発

#### 1. はじめに

文部科学省は「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業等」の中で、小学校における外国語教育の早期化・教科化への対応として、「小学校の新たな外国語教育における新教材の開発・整備事業」、「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」、「外国語教育強化地域拠点事業」等の事業を実施している（文部科学省、2017）。これらの事業のうち、「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」は、小学校英語の早期化・教科化に向けて、小中の学びの円滑な接続を図るため、各校において系統的な教科指導に当たる専門性の高い教員を段階的に養成することを目的とした事業で、各小学校において英語教育を

担当する教諭（各校1人、計約2万人）を対象としている（文部科学省、2016）。大学や教育委員会等に委託して行われるこの事業は、(1)小学校の現職教員が外国語（英語）の中学校教諭免許状を取得するための免許法認定講習等の開発・実施、(2)小学校現職教員が次期学習指導要領に即した新たな指導方法等を加えた専科指導に対応できるプログラムの開発及び講習の実施、の2つで構成される。

秋田大学は平成28年8月に文部科学省からこの事業の指定を受け、秋田県教育委員会と連携しながら、秋田県の小学校現職教員を対象とした講習プログラムの開発を行ってきた。事業計画では、平成28年度に前述の2つの事業の講習プログラムの開発を行い、平成29年度及び平成30年度の2年間で開発した講習等の実施を行うこととした。このうち平成29年度においては、(1)の事業に関して設定した8つの講習科目のうち、「各教科の指導法」の免許法科目である「英語科教育学」、「英語学」の免許法科目である「応用言語学」、「英語コミュニケーション」の免許法科目である「英会話演習」、「教育相談の理論及び方法」の免許法科目である「教育相談の理論と方法」の4つについて、休日等を利用して主に集中講

2017年11月27日受理

<sup>†</sup>The An interim report on the development of an English language teaching program for elementary school teachers

\*Yasuhiko WAKAARI, Masako SASAKI, Adrian PATERSON, Kazuki SASAKI, Akira MURAKAMI and Hiroto HOSHI, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

義の形式で実施した（資料1参照）。また(2)の事業に関しては、「動物を使った教材」「マザーグースを歌おう」「英文法を発見する」と題した90分～120分程度の講習を、5月から7月の休日を利用して3回開講した（資料2参照）。

### 資料1 事業(1) 実施日程

#### 実施事業(1)

(小学校の現職教員が中学校教諭免許状(外国語(英語))を取得するための免許法認定講習)

平成29年度スケジュール

講習科目名：英語科教育学

担当教員：佐々木雅子

日程：4月15日(土) 8:50-16:00

4月16日(日) 8:50-16:00

6月2日(金) 附属中学校公開研究協議会

6月9日(金) 附属小学校公開研究協議会

7月1日(土) 8:50-16:00

講習科目名：応用言語学

担当教員：若有保彦

日程：5月13日(土) 8:50-16:00

5月14日(日) 8:50-16:00

9月9日(土) 8:50-16:00

9月10日(日) 8:50-16:00

講習科目名：英会話演習

担当教員：Paterson, Adrian

日程：6月10日(土) 8:50-16:00

6月11日(日) 8:50-16:00

10月14日(土) 8:50-16:00

10月15日(日) 8:50-16:00

講習科目名：学校カウンセリングの実際の問題について

担当教員：渡部昌平

日程：8月5日(土) 8:50-16:00

8月6日(日) 8:50-16:00

### 資料2 事業(2) 実施日程

#### 実施事業(2)

(次期学習指導要領に即した新たな指導方法を加えた専科指導への対応のための講習)

平成29年度実施要項

#### 第1回「動物を使った教材」

日程：2017年5月28日(日) 14:00-16:00

場所：秋田大学教育文化学部3号棟232室(書道室)

講師：村上東

概要：羊や山羊の鳴き声は日本語でしたら「メー」ですが、英語では「バー」となります。鶏は「コカドウルドウ」です。こんな違いを利用して教材をつくってみましょう。おしまいは”Going to the Zoo”を英語と日本語で歌います。動物の動きを使った教材もご紹介します。

#### 第2回「マザーグースを歌おう」

日程：2017年6月18日(日) 14:00-16:00

場所：秋田大学教育文化学部3号棟254室

講師：佐々木和貴

概要：英国の伝承童謡(マザーグース)は、英語圏の人々に今も親しまれており、日本の小学生がはじめて英語にふれる際にも、最適の教材のひとつであろう。そこでこの講義では、マザーグースのなかでも、代表的なものをとりあげて解説するとともにDVDも視聴し、最後には実際に一緒に歌ってみたい。

#### 第3回「英文法を発見する」

日程：2017年7月8日(土) 14:00-16:00

場所：秋田大学教育文化学部5号棟407室

講師：星宏人

概要：文部科学省は『日本語と英語の語順の違いなど文構造への気付き』等に関する指導に必要な新たな教材(Hi, Friends! Plus)を作成中である。この動向を踏まえ、この講習ではD. CrystalやR. Hudsonによる英文法のdiscovery learning(発見型学習)を紹介し、小学校英語教育への含意を検討、討論する。

本稿は平成29年度に実施した前述の(1)及び(2)の事業のうち、英語に関する講習における取り組みやそのねらい、成果や今後に向けた課題について、講習を担当した教員の報告をまとめたものである。

## 2. 各講習における取り組みとそのねらい

### 2.1 「英語科教育学」での取り組みとねらい

本科目は、中学校英語科の授業が実践できることを目標とし、中学校英語科の授業に必要な理論および指導方法・技術を身につけることを目的とした科目である。理論の部分においては、第二言語習得論の視点から英語学習の意義について理解し、英語教授法についての知識を豊かにすることを目的とした。指導方法・技術の部分においては、授業のデザイン・指導・評価についての実践的な基礎知識と基礎技能を身につけることを目的とした。さらに、小中連携についての深い考察ができることも目的に加えた。

本講習は実質的には小学校での英語の教科化に備えた英語指導能力の向上であることを踏まえ、附属中学校及び附属小学校での公開授業の参観を間に挟み、事前では授業デザインおよび授業観察に必要な知識を学び、事後では振り返りをもとに自分の授業をデザインすることとした。

事前の7回分の授業では、附属中学校の公開授業で取り上げられるbe going to～を言語材料に、受講者各自が指導案を構想することを目標としながら、指導案作成上有用な知識を学ぶと共に、授業の基本的な組み立て方について学習した。具体的には下記のような内容である。

- ・学習指導案例をもとに生徒観、題材観、指導観、評価の観点を理解し、デモンストレーションを参考に、授業デザインについて具体的なイメージを持つ。
- ・FluencyとAccuracyについて、「話す」「書く」の活動の順序の具体例から、双方のバランスをとることの重要性について理解する。
- ・コミュニケーションの目的を設定することの重要性、Focus on FormS, Focus on Meaning, Focus on Formについて理解する。
- ・第二言語習得論のうち、インプットとインテイクの違い、言語処理のメカニズム（流れ）（小柳&峯, 2016を参照）、Krashenの5仮説（モニター理論）、SLAを促進する言語

処理モードFonF（Form, Meaning, Functionの同時処理）（和泉, 2009を参照）、インプット仮説（Krashen）、インタラクション仮説（Long）、会話的調整、明示的知識と暗示的知識、Interface（strong, non（Krashen）, weak（FonF））について理解する。

- ・Leo Lionni作の絵本“Little blue and little yellow”を用いた指導例の提示。
- ・様々なReadingの方法（individual reading, chorus reading, buzz reading, pair reading, read and look-up, response reading, shadowing）について理解する。
- ・PPP（presentation, practice, production）とTBL（task-based learning）の比較を通して、コミュニケーション・アプローチについて理解する。

附属中学校及び附属小学校の公開授業研究会後の事後の4回分の授業では、授業参観および協議会を通して深めた事前の学習内容の理解をもとに、今度は自分自身の授業をデザインし指導案を立てることとした。扱う言語材料は、附属中学校の公開授業で取り上げられた言語材料のbe going to～を扱った。計画段階では、受講者が指導案を作成し模擬授業を行うことを予定していたが、予想以上に受講者の不安は大きかった。したがって、実際には、模範授業ビデオ（文部科学省, 2012）を視聴し内容について意見を出し合いながら中学校の英語の授業についての理解を再確認した後で、個別に指導案を作成した。その後グループで指導案の協議を行い、最後に各グループが協議内容を紹介し合った。

受講者は、(1)第二言語習得論の中で最も参考になった点、(2)作成した指導案の改善点、(3)中学校で英語を教えることになった場合の留意点、の3点についてレポートに取り組み、理論と指導方法・技術の統合を図った。

### 2.2 「応用言語学」での取り組みとねらい

「応用言語学」は、広義の意味ではその名が示す通り言語学の成果を応用する学問であるが、狭義には言語（学）理論を特に外国語教授法の研究に応用する学問と定義される。この科目においては、後者の定義に基づき、言語学及び第二言語習得研究の成果を小学校及び中学校における英語指導にどう活用できるか検討すること、また小学校教員の専科指

導を行う上で必要な知識及び技能を身につけることを主な目的とし、この目的の達成のため次の5つを具体的な目標として設定した。(1)音声と語彙、文字の分野における言語学及び第二言語習得研究の成果(理論)について基本的な知識を身につけること、(2)(1)の理論を教室で実際に使用される指導方法・技術にどう反映させるかについて、活動の体験を通じて理解を深めること、(3)日本の外国語教育政策の方向性について把握すること、(4)小学校外国語(英語)及び外国語活動担当教員に何が求められているかを理解すること、(5)次期学習指導要領のキーワードの一つと考えられる、「思考・判断・表現」の力を身につけさせるための教材研究の方法について理解すること。

上記の5つの目標を達成するため、第1～15回の授業において、次のような活動を行った。まず第1回では、目標(3)(日本の外国語教育政策の方向性についての把握)に関連して、現行学習指導要領の小中高の目標を比較する活動、小中高の目標の共通点をRivers(1968)が挙げた外国語教育の意義と比較する活動、現行学習指導要領の目標と次期学習指導要領の目標を比較する活動などを行った。また第2回では、目標(4)に関連して、岡・金森(2007)が挙げた「小学校教員が英語を教えるのに必要な資質」の具体的な内容を検討する活動を実施した。

第3回及び第4回では、目標(1)に関連して、第一言語習得と第二言語習得の違いを比較する活動や、白井(2008)が提案した第二言語の習得理論に基づく外国語の効果的な学習法及び語彙習得の理論を確認する活動を行った。また第5回～第12回は、目標(2)に関連して、コア・ミーニングの概念を語彙指導に活用する方法(第5回)、英語の文字が作られるまでの過程を文字指導に活用する方法(第6回)、英語の文字と発音の関係を確認するとともに、フォニックス指導を普段の授業で実践する方法(第7～9回)、音連結やセンテンス・ストレスなどを意識させたり、音読や読み聞かせの指導に活用する方法(第10～12回)などについて、実際に体験しながら学べるような活動を実施した。

第13回及び第14回は、目標(5)に関連して、会話教材や異文化理解を題材とした教材を批判的に読む活動を行った。最後の第15回では、講習のまとめとして、秋田県内のある小学校で行われた外国語活動の授業ビデオを視聴して検討を行うとともに、これま

での授業で学習した項目の確認を行った。また、(1)講習で学んだこと、(2)講習から自分で考えたこと、の2点に関するレポートを期末課題として指示した。

### 2.3 「英会話演習」での取り組みとねらい

「英会話演習」においては、(1)会話の理論的モデルに関する知識を身につけること、(2)会話の理論的モデルを外国語の授業へ応用する方法に関する知識を身につけること、の2つを目標として設定した。このうち、(1)について、具体的には次の内容を説明した。

- ・ 会話とは技術であり、その習得には練習が必要となる。
- ・ 会話を技術と捉える時、その技術は、聴解、発話、談話に関する知識、社交の技術といった下位区分に分類できる。この中で発話を一番重要な技術と考える傾向があるが、Levelt(1989)の発話過程のモデルが示すように、実際には聴解が会話の重要な構成要素となる。
- ・ 言語の知識がいかなる言語行為にとっても必須となる。会話においては、語彙、文法、発音、談話の諸特性といった知識が必須となる。
- ・ 慣用句は繰り返しによる丸暗記で習得でき、複雑な文法の知識も必要としないため、初級レベルの学習者に有用である。
- ・ 実際の会話においては、「I'm going to the... Umm, Errr?」のような文法的に正しくともキーワードが欠落した文より、「shop me go now」のような文法上間違っているキーワードを含む文の方が意味が通じるため、学習者の注意は語彙のみに向きがちになる。しかし、文法は意味を調整し細部を伝える役割を持っており、指導は必要である。
- ・ 発音に関しては、日本語と英語の両方で共通して使われる音が多いため、通常は問題が起きないが、/r/と/l/、/θ/と/ð/、/f/と/v/、/s/と/sh/などの区別には注意が必要である。
- ・ 多くの日本人教員は、発音の仕組みを知らないため、自信を持って指導を行うことができない。よって、発音の仕組みを学ぶことが必要となる。
- ・ 発音学習のポイントは、新たに学ぶ音を憶える際に、既に発音できるようになっている音(日本語も含む)と関連づけることである。

- ・相手は文脈から推測できるため、不適切な発音によって会話が妨げられるとは限らないが、よりスムーズな会話を行うためには、音素以外に抑揚、強勢、音の同化などの練習も重要である。
- ・語彙、文法、発音などの欠点は社交技術で補うことができるが、途切れず流暢に話す能力などを補うことはできない。
- ・会話においては社交能力（ある状況で適切に行動する能力）も重要である。不適切な行為の例としては、放送禁止用語などの使用、避けるべき話題（年齢、給料、既婚未婚の別、体重、性の嗜好など）、接触したり過度に近づいたりする行為などが挙げられる。
- ・相手との関係は我々の発話に影響を与える。他者や知人に対しては、家族や友人よりも丁寧に接している。
- ・会話における言語の側面と社交の側面とをつなぐのが談話能力（会話の流れを予測して、次に何を言うべきか、どの程度丁寧な表現を求められているか、といった枠組みの知識）である。会話の流れは相手や状況、目的などによって決定される。また、これらが話題や丁寧さの度合いを決める。

目標の(2)に関しては次の内容を説明した。

- ・会話の指導に関してNation & Macalister (2010) が推奨しているのは、意味に焦点を絞った情報発信、意味に焦点を絞った聴き取り、言語面に焦点を絞った学習、流暢な会話の流れの四要素におおよそ均等に時間を配分した授業展開である。
- ・会話指導で問題となることが多いのは評価である。教員が学習者と話す場合、評価の一貫性は担保されるが、会話に参加すると教員の負担が重くなる欠点がある。一方、別の学習者に評価を任せる場合、教員が会話に専念できる利点はあるが、その学習者に与える評価基準が明確なものでなければ評価の一貫性は失われる。また会話の評価においては評価尺度を導入している場合が多いが、主観的な評価に傾くきらいがある。客観性を高めるためには授業の主眼点を表にして点検項目にしておく方法がある。

## 2.4 「動物を使った教材」での取り組みとねらい

小学校現場で実際に外国語活動を教えている教員

や初等英語教育に関心のある学生から、*Hi, friends! 1* (文部科学省, 2012) や *Hi, friends! 2* (文部科学省, 2012) などの文部科学省が出している教材だけでなく、自前の教材をつくりたい、という希望を聞くことがあった。このような希望に配慮し、本講習では、教材を実際に作る過程や実践例の紹介を主なねらいとした。題材の例としては、児童にとって身近で、多くの児童英語教材で扱われている動物を取り上げた。

教材開発にあたっては、(1)教材として使用する素材の収集、(2)収集した素材の教材化(タスク化)、の2つの過程があると考えられる。このうち(1)に関して、本講習ではインターネット上にある画像を利用する場合に購入や許可申請の必要がない動物の写真を集めるなど、著作権等の問題に配慮した素材の収集が必要であることを意識させること、(2)に関しては、集めた写真に写っている動物の鳴き声を英語でどう表現するかをタスク化する際の留意点や、タスクの後で米国の童謡「動物園へ行こう」を歌うといった実際の授業展開を意識した活動例の紹介ができるよう心がけた。

講習では、はじめに、鳴き声の音と黒板に貼った動物の写真を結びつける活動を実施した。次に、「動物」を題材としたもう一つの活動例として、さまざまな動作をしている猫の写真を見せ、児童に英語の動詞で答えてもらうタスク、一枚の写真に写っている猫の数を英語で数えたり、毛皮の色を言ったりするタスクを紹介した。その後、前述の「動物園へ行こう」(“Going to the Zoo”)という歌を紹介した。この歌はYouTubeで複数の歌手のものを聴くことができるし、基本の三和音だけで伴奏がつけられる利点もある(伴奏の難易度では小学校免許取得の際の鍵盤課題曲よりも平易と考えられる)。今回の講習では、英語の歌詞やカタカナによる発音表記に加え、日本語でも歌えるよう講習担当講師による翻訳を併記したものを使用した。さらに、翻訳の工夫に関連して、ディズニー・アニメの『ピノキオ』の挿入歌「星に願いを」に和訳をつけたものを紹介した。

## 2.5 「マザーグースを歌おう」での取り組みとねらい

本講習では、通称「マザーグース」と呼ばれる英米の伝承歌謡群のうち、代表的なものを取り上げた。その目的は、小学生にとって英語の音韻や韻律を理

解させ、また英語圏の文化を知るために格好の教材であるマザーグースを、実際に歌ってみることで、小学校英語への導入教材としてどのように利用できるか、理解を深めることにある。

講習のプログラムは以下のように計画した。

- (1) What was / is Mother Goose?
- (2) Quick Guide for Mother Goose
  - (a) Tongue Twister “Peter Piper”
  - (b) “The Alphabet”
  - (c) “Head, Shoulder, Knees and Toes”
  - (d) “LONDON BRIDGE”
  - (e) “MARY HAD A LITTLE LAMB”
  - (f) “Twinkle, Twinkle, Little Star”
  - (g) “Golden Slumber”

まず、1においては、「子供部屋から生まれた」のではなく、「子供部屋に保存された」ヨーロッパの口承文化としてのマザーグースについて、その成立の歴史を述べ、さらに現在においても、それがいかに英語圏で広く愛唱されているかを、20世紀マザーグース研究の金字塔である Iona & Peter Opie 夫妻の編集した *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (Oxford UP, 1951) および *The Oxford Nursery Rhyme Book* (Oxford UP, 1955) を回覧しながら概説した。

次に2では、最初に英語圏で最も有名な早口ことばである「ピーター・パイパー」で緊張をほぐしたあと、マザーグースのなかでも、とりわけ著名で、なおかつ小学生にとってもなじみ深い6曲をとりあげ、それぞれについて詳説した。はじめにそれぞれの曲の文化的・歴史的背景について説明し、続いて楽譜付きの歌詞を配布した上でDVD教材を利用しながら実際に何度か一緒に歌った。歌い終わった後は、BBC School Radio: Nursery songs and rhymes <<http://www.bbc.co.uk/learning/schoolradio/subjects/earlylearning/nurserysongs>> などのインターネット上の動画サイトを視聴し、それぞれの曲が英語圏でどのように教材として利用されているか、具体例を確認した。

## 2.6 「英文法を発見する」での取り組みとねらい

文部科学省は「日本語と英語の語順の違いなど文構造への気付き」等に関する指導に必要な教材 (Hi, Friends! Plus) を作成している。この動向を踏まえ、

本講習ではCrystal (1996) の *Discover Grammar* 及びHudson (1998) の *English Grammar* による「discovery learning (発見型学習)」を紹介し、その小学校英語教育への重要性について検討及び討論を行った。

具体的には、講習の前半で、Hudson (1998) の冒頭 (Using This Book) を精読し、「英語教師は英文法を生徒に一方的に教えつけるべきではなく、生徒のレベルに合わせて英語のデータを少しずつ丁寧に示し、生徒一人一人に自ら英文法に気づかせ、英文法を発見させるべきである」と提案するHudson (1998) のDiscovery Learningを紹介、検討し、意見交換をした。

後半部分ではCrystal (1996) のChapter 1: Words とChapter 2: Sentencesを精読し、英文法に関しての具体的な考察をした。その上で、「発見型英文法学習において重要なことは、教師があたえる英語に関するクイズ等に生徒が正しく答えるようなことではなく、下記の(1)~(15)のような英語運用のため重要と考えられている『文法概念』に生徒一人一人が自ら気づき、それらを自ら発見することである」と提案し、それについて受講生と討論した。

- (1) word structure
  - (2) base forms
  - (3) prefixes
  - (4) suffixes
  - (5) sentence structure
  - (6) completeness of sentences
  - (7) Standard English vs. Nonstandard English
  - (8) grammaticality vs. ungrammaticality
  - (9) grammatical rules
  - (10) acceptability vs. unacceptability
  - (11) complexity of sentences
  - (12) formal style vs. informal style
  - (13) sentence length
  - (14) sentences in writing
  - (15) sentences in speaking
- etc.

## 3. 各講習における成果と課題

### 3.1 「英語科教育学」における成果と来年度の講習に向けた課題

最後の授業において授業デザインまで到達した受講生は、各自の指導案を共有しグループ及び全体協

議によって中学校英語科授業について理解を深めたことで、達成感を感じている様子であった。より具体的な成果としては、受講者のレポート執筆内容から、以下の3点が挙げられる。

一つ目は、授業の見方と作り方に影響を与えた第二言語習得論についてである。具体的には、(1)フォークス・オン・フォーム、(2)言語処理のメカニズム（インプット→気づき→理解→取り込み→統合→アウトプット）、(3)インプットとインテイクの違いの3点にレポートで言及する受講者が多かった。特に、自身の英語学習経験では単語や文法は覚えることが大前提であったが、言語活動において形式・意味・機能の3要素の結びつきが強化されるよう、使いながら習得できるような授業をデザインすることを試みたいと述べる受講者が10名（14名中）いた。

二つ目は、自身の外国語活動の授業の指導改善への意欲である。具体的には、意味を推測する／させることの有用性、オール・イングリッシュの意義と目的、教室指導におけるインプットをインテイクにするための指導、学習者の主体性を引き出すタスク等について、追究していきたいと述べる受講者が多くいた。

三つ目は、学びの深化である。第二言語習得のプロセスは、次期学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」に通じる点があることや、他教科における指導との共通性に気づいている受講者もいた。

一方で、課題としては、理論の部分においては、第二言語習得論の知識の理解を促進するために、映像資料にあった具体的な授業場面と関連付けながら解説したものの、受講者自身の授業と関連させるまでには至らなかったことが挙げられる。受講者が自身の授業を第二言語習得論の観点から振り返る必要がある。また、指導方法・技術の部分においては、指導案作成の段階で終了し、模擬授業を行うまでには至らなかったことが課題である。受講者の不安や多忙なスケジュールを考慮した計画変更ではあるが、実際に模擬授業を行い分析し協議する方が効果的である。知識を頭で理解することや参観した授業を鋭く観察できることと、実際に授業を組み立て行うことは、同一の力量を表すものではないことから、受講者の授業の一部分でも講習に取り入れる必要がある。

### 3.2 「応用言語学」における成果と来年度の講習に向けた課題

本講習の最後に受講者に課した課題レポートの内容から講習の成果を探ると、まず課題レポートの最初のテーマ「講習で学んだこと」からは、半数以上の受講者が次のキーワードを挙げていた：(1)フォニックス、(2)教材分析、(3)言語習得。また、3分の1以上の出席者が、以下の(4)～(8)に言及していた：(4)読み聞かせ、(5)強勢、(6)イントネーション、(7)文字の歴史・発音、(8)語彙習得。

(1)のフォニックスについては、約3分の2の受講者がこれに言及していた。受講者の課題レポートに見られるコメントからは、「例外もあるが、発音のルールも身に付けることで、単語の発音が推測できるし、音から単語を認識できるようになるので、リスニングにも役立つと思われる。この機会に、フォニックスの知識を整理しておきたい。」「フォニックスは、文字と音の関係を効果的に学ぶことができる方法の一つであると感じた。（中略）これまでの課題として、子どもたちからは「読む」「書く」をもっとやりたかったという声が、教員からは、音声から文字への学習に円滑に接続されていないという声が挙がっているようだ。音声から文字への接続が円滑に行われるために、フォニックス指導も一つの手立てとして取り入れていけたらよいと考える」などが見られた。

この他、課題レポートの2つ目のテーマ「講習から自分で考えたこと」に関しても、フォニックスのルールやその指導における課題について調べ、これらの情報をもとに小学校の外国語でどのような授業を展開すべきかに関して自分の意見を述べる受講者が複数いた。

平成31年度から小学校に外国語が導入されるにあたり、最も大きな変化の一つとなるのが、小学校高学年における本格的な文字の導入である。受講者のコメントに見られるように、音声から文字への円滑な接続という課題に対する受講者の意識を高められたことは、本講習の1つ目の成果と考えられる。

(2)の教材分析に関しては、中学1年生用の英語教科書にある会話を題材にとりあげたが、受講者からは、「教科書に書いていることなので問題ないと思っていたが、分析してみると不自然な点が多かった。（中略）教科書を通して、英語のコミュニケーションを学ぶというように意識を変えていかなくてはな

らないと感じた」や、(教科書の会話文について)「日常生活とのずれが生じていることを学んだ。それは、学ばせたい構文を確実に身に付けてほしいということから、意図的に必要最低限の文章構成になっているため、すっきりさせているということもある。(中略)教科書の会話に一文を自分で考えて付け足してやり取りすることで、気持ちが入ったり、考えたりしながら読むことが出来ると思った」などのコメントがあった。

前述の通り、小学校高学年における文字の導入に伴い、会話のスク립トのある教科書の使用が予想される。講習で行った分析の活動を通して、教科書をそのまま教えるのではなく、より自然な場面になるように工夫する意識を喚起できたことは、講習の2つ目の成果と考えられる。

本講習の3つ目の成果としては、言語習得に関する学びを深めたことが挙げられる。課題レポートの2つ目のテーマである「講習から自分で考えたこと」に関しても、年齢と言語習得の成果との関連を調べたり、第二言語習得過程の様々な実証的研究成果をどのように小学校外国語に活用できるかを考える例が見られた。

一方、本講習の課題としては、受講者の英語力にかなりの差があったため、活動によってはこちらの想定外に時間を費やし、予定の内容を消化できない部分を生じさせてしまったことが挙げられる。

具体的には、第二言語習得の理論に関して、洋書を利用してお互いに別々の箇所を読んで説明するというジグソーリーディングに近い活動を行った際に、普段指導している学生であれば5分程度の黙読の後に説明に移行できていたものが、黙読の段階に30分近くを要したことがあった。結果的に、音声指導の部分で、個々の音に関する発音練習の時間を大幅に削るなどの対処を行わざるを得なくなった。

このような場合の対応策としては、受講者が自身の英語力について十分な認識を持っている成人であることを踏まえ、ペアやグループを決める際に、英語力を基準にして活動の相手を変えることが考えられる。例えば、英語力の十分な受講者とそうでない受講生の数が半々くらいである場合は、前者に読ませる部分を多くし、後者を少なくするなどの配慮ができる。また高い英語力を持つ受講生とそうでない受講生の数のバランスがとれない場合には、英語が得意な人やそうでない人同士でペアを組ませ、前者

のペアには当初の課題を終えた後でさらに別の課題を追加することが考えられる。

もう一つの課題としては、最初の課題と同様に、言語習得理論についての知識が豊富な受講者とそうでない受講者が混在していたため、受講者によっては話が基本的すぎたり、あるいは難しすぎたりする印象を与えてしまう結果になったことが挙げられる。この問題に関しては、何人かの学習者が、課題レポートで話のレベルの高さに言及していたことから窺えた。ある分野に関する受講者の知識レベルが大幅に異なる場合、どのような対応が考えられるか、来年度以降検討していきたい。

### 3.3 「英会話演習」における成果と来年度の講習に向けた課題

「英会話演習」の授業の中で「4/3/2」という活動を実施した。この活動の手順については次の通りである。

- (1)学習者に平易な話題を与え、短時間に準備させる。
- (2)全員を二つの同心円状に座らせ、内側の学習者は外を、外側の学習者は内側を向き、二人1組にする。一方の円の者が発話者を担当する場合、もう一方は聞き手に回る。
- (3)発話者は4分間しゃべり、聞き手のほうは相手の発話に注意を傾ける。
- (4)1回目が終わったら、2回目は席を一つずらして相手を替え、今度は3分間同じことをする。
- (5)3回目は同じ事を2分間に縮めて行う。
- (6)3人の聞き手に同じ話をし終わったら、発話者と聞き手を入れ替えて同様の作業を繰り返す。
- (7)2つの同心円が同様の作業を終えたら、意味に焦点を絞った練習に切り替え、今度は同じ話題を相互のやり取りのある対話として話し合う。

この「4/3/2」の活動を行った際、当初は受講者の口が重くなかなか話が弾まなかった。しかし、反復が進むにつれて話すようになり、最後の対話の部分ではこちらが活動を打ち切るのに苦勞するほど盛り上がっていた。この活動により会話の力のある程度伸ばすことができたことが、本講習の成果の一つと言える。なお、このことは、活動後のふりかえりの際に、学習者が「(今まで経験しなかったことだが)自身の会話能力に自信を持てた」旨の意見を述べていたことから窺える。

また、最終評価の目的で講習中にグループ毎のマ



イクロ・ティーチングを行ったが、そのマイクロ・ティーチングの中で、講習で紹介した原理や技術を使った熱意あふれる授業が行われていた。このことから、講習の成果の2つ目として、今回の講習の目標を一定程度達成できたことが挙げられると考える。

一方で、本講習の課題としては、次の2点を挙げることができる。

- (1)初めて実施した講習であることから、受講者がこの科目の(活動ではなく)講義の部分に関して、どのくらいの時間が必要になるか予測できなかった。結果として今回はまず講義を優先し、その後活動を行うという手順を踏んだが、講義をテーマ毎に分割し、それぞれの合間で関連する活動を行った方が、どの程度教材や指導を受講者が理解できているのかを確認できたと考える。
- (2)2.4で述べた通り、発音については、間違いが起こっても文脈からある程度推測できるため、理解に支障を来すことはあまり多くない。このことから、今回の講習では語彙や文法など、他に扱う事項を確実にカバーすることを優先し、発音訓練の時間を必要最小限に限定した。しかし、受講者からは、日本人学習者の多くが間違いを気にして話すことに神経質になっているという指摘を受けた。その意味では、発音の仕組みに関して(より時間をとって)受講者の理解を深めた方が、受講者自身の自学自習で発音を改善し、自信を持って発話することにつながられたように感じている。

### 3.4 「動物を使った教材」における成果と来年度の講習に向けた課題

受講者が書いたアンケートのコメントには、「動物の鳴き声の英語と日本語の違いを知ることは楽しいと思います。どこかのLessonで入れ込めないか考えたいです」「教材作成のヒントを得ることができました。(中略)教科書にはない英語でも興味を広げることが大切だと思います」「その時間に何をつかませるかははっきりとさせて、今日のように写真や絵を使ったり、歌や動作で実際に動いたりして、学習を進めていけるよう考えてみたいと思います」など、今回の提案に対する肯定的な評価があった。これを本講習の成果として分析すると、一つ目として、授業でよく使われる題材の中に言語や文化の違いに気づかせる要素が含まれていることを受講者に

意識させられた点が挙げられる。例えば、黒板に貼った動物の写真とその鳴き声の音を結びつける活動ではヤギを取り上げ、日本語でヤギの鳴き声は「メー」で英語では「バー」と異なるが、両者には両唇音という共通点があること、このようなささやかな意外性によって児童の言語に対する興味を喚起できることに言及した。また、講習で取り上げた「動物園へ行こう」の翻訳については、秋田県で使う場合は「明日は行くんだ、大森山」のように、地域性を盛りこんだ工夫ができることにも言及したことが成果に結びついたと考えられる。

二つ目の成果としては、授業で行う活動の連続性に対する意識を喚起できたことがある。例えば、前述の動物と鳴き声のマッチングタスクでは、授業で使用する際の留意点として、この活動の前に、英語におけるそれぞれの動物の呼び名を確認する方が児童にとって無理がないこと、またこれをふまえ、童謡を歌う活動は2時間目以降に実施する方が現実的であることに言及した。また、さまざまな動作をしている猫の写真を使った活動例の紹介では、“jump”のような、すでにカタカナ語になっていて音声面でも児童になじみがある動詞は直接タスクで使っても問題は生じないが、“sleep”などややなじみが薄いと思われる語の場合はタスクの前に意味確認などの配慮が求められることに言及した。

一方、課題としては、今年度の講習の中で、さまざまな動作をしている猫の写真を使った教材を紹介した際、当初の予定では“Jumping”や“Running”等、現在分詞を解答例としていたが、外国語活動では「進行形」まで扱わないことが普通であるとの指摘をいただいた。外国語(英語)に慣れ親しむといっても、簡単な答えが用意されているゲームから中学校英語の教科書に記載されている相当に難易度の高い例文を口頭でやり取りする場合まであるように聞き及んでいるが、いつ、いかなる順番で、いかなる準備段階を経て、教材を提示するのか、留意すべき点がたくさんあることを改めて確認した。

大学の授業で学生と練習する際は、一回の授業のなかで、限られた分量だけ新出の情報が無理なく盛り込まれるように、また、たくさんの練習がなくとも実施できるよう、考えながら試行錯誤を続けていたつもりだったが、現場で実際に外国語活動を担当している教員を対象とした講習では、学習者の英語レベルやニーズが異なることに留意して授業を展開

していく必要がある。このことを来年度に向けた課題として強く認識した。

### 3.5 「マザーグースを歌おう」における成果と来年度の講習に向けた課題

講習の最後に実施したアンケートでは、参加者から「このように、歴史的に継承されてきた文化を知り、現代に活かしていくことは大切であると感じた」、あるいは「マザーグースには元歌があって、替え歌として広まったことを知り、色々調べたくなりました」といった文化的な側面へのコメントが複数あった。また「コミュニケーション能力の育成という点では、英語圏の文化と日本の文化をそれぞれ尊重し合いながらやり取りをすることが必要で、その点でマザーグースは、両者の架け橋として、異文化理解の良い教材になるのではないだろうか」といった、教材としての実際的な可能性についての意見も寄せられた。

このアンケート結果からみて、現場の小学校教員に、英語圏の伝承歌謡の文化的側面の重要性を示唆することができたことが、まず、本講習の成果として挙げられるだろう。さらに、実際に歌うという体験を介して、またインターネットの動画サイトを視聴することで、マザーグースを小学校英語への導入教材として開発していくための方策、とりわけ異文化理解教育への応用の可能性を提示することができたという点でも、本講習は一定の成果を収めたものと思われる。

他方で、課題としては、今回は90分間の講習であったため、マザーグースという伝承歌謡群の概略しか説明することができなかった。来年度実施予定の事業1では、4日間にわたる集中講義の形式となるので、マザーグースの全体像を、詳細に解説・分析できるものと思われる。

そこで、まずもっとも重要な課題は、小学校英語における異文化理解という分野で、マザーグースをどのように教材として活用できるか、その具体的な方策を提示することであろう。

またさらに、マザーグースを英語の音韻や韻律を理解させる教材として用いるためには、英語の音を純粹に楽しむような指導も必要である。そこで、マザーグース特有の韻律や音遊びについても分析し、また実際に暗誦してもらうことで、こうした課題にも対応したい。

最後に、日本語訳、特に谷川俊太郎訳『マザーグース』1～4（講談社文庫）を利用することで、日本語教育とも連携した教材としての可能性も示唆できればと考えている。

### 3.6 「英文法を発見する」における成果と来年度の講習に向けた課題

講習終了後実施したアンケートでは参加者から「気づくということに関して今まで何に気づかせるかよく分かっていませんでしたが、grammaticality, acceptability等の「文法概念」であるというお話に非常にすっきりしましたし、納得しました。胸につかえていたものが取れた感じです。ありがとうございました。確かに「文法概念」に気づけば応用にもつながっていくと思います。今回はものの見方を今までと少し変えられたのが大きな収穫でした。」「特に文法に関して学べる機会は現職の教員にとっては非常にありがたいです。」などの感想が寄せられ、一定の成果があったように思われた。

来年度開講予定の「英語学概論」は秋田大学教育文化学部の学生が英語の教員免許状を取得するための必修科目である。近年はLyons (1981) の *Language and Linguistics: An Introduction* を教科書として使用し、英語学における下記の学術分野をカバーしている。

- (1) language
  - (2) linguistics
  - (3) grammar
  - (4) semantics
  - (5) language-change
  - (6) language and mind
  - (7) language and society
  - (8) language and culture
- etc.

上記の英語学の学術分野を深く理解し、その理解を柔軟に英語教育に応用できるような小学校教諭の養成のため、平成29年7月8日実施の講習「英文法を発見する」での経験を基に、平成30年7月7～8日、10月6～7日の集中講義（4日間）のシラバス、内容を考案しなければならない。

#### 4. 終わりに

ここまで、今年度実施した英語に関する6つの講習それぞれについて、取り組みとねらい、成果及び課題を紹介してきた。全般的には、受講者が講習に熱心に取り組んでおり、設定した目標も一定程度達成できた旨の記述が多かったと言える。一方で、どの講習においても、何らかの課題が残されていることが明らかになった。

6つの講習のうち、事業(1)の講習（英語科教育学、応用言語学、英会話演習）については、それぞれが90分を単位として少なくとも15回分の授業を行っていたため、事業(2)の講習に比べ課題も多く見つけることができた。それらの課題の中には、受講者の英語力や外国語教育に関する知識の程度が事前に把握できないことに起因するもの、受講者の多忙な状況に起因するものなどが見られた。教員免許状更新講習のように、事前に受講者のニーズを確認することに加え、講習に備えるための学習課題を伝えたり、英語力や外国語教育に関する知識の程度を受講者に申告してもらうなど、事務方と連携して、講習を円滑に実施し、目標の達成度を向上させる取り組みができないか検討していく必要がある。また、事業(2)の講習については、90～120分という限られた時間の中で何を優先して受講者に伝えるべきかを明確にすること、講習担当者が小学校外国語活動の現状や課題について事前に把握しておくことなどが改善のポイントと考えられる。

来年度は、今年度の事業(1)の講習担当者が事業(2)の講習を、また今年度の事業(2)の講習担当者が事業(1)の講習を担当することになる。担当者間の情報交換を密に行い、今回で明らかになった課題が少しでも解決された状態で来年度の講習を迎えられるよう、残された時間で改善に向けた模索を続けていきたい。

#### 引用文献

- 和泉伸一 (2009). 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』東京：大修館書店。  
 岡 秀夫・金森 強 (2007). 『小学校英語教育の進め方－「ことばの教育」として－』東京：成美堂。  
 小柳かおる・峯布由紀 (2016). 『認知的アプローチから見た第二言語習得－日本語の文法習得と教室指導の効果』東京：くろしお出版  
 白井恭弘 (2008). 『外国語学習の科学－第二言語習

- 得論とは何か』東京：岩波書店  
 文部科学省 (2012). 『Hi, friends! 1』東京：東京書籍。  
 文部科学省 (2012). 『Hi, friends! 2』東京：東京書籍。  
 文部科学省 (2012). 「静岡県浜松市立南部中学校学習指導案 主幹教諭 土屋裕子 中学校版 新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/02/1325838\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/10/02/1325838_3.pdf) (2017年10月16日アクセス)  
 文部科学省 (2016). 「平成28年度「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施」事業の指定について」(2016年4月15日、文部科学省報道発表)  
 文部科学省 (2017). 「参考資料4」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/123/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/16/1384980\\_010.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/05/16/1384980_010.pdf) (2017年10月16日アクセス)  
 Crystal, D. (1996) *Discover Grammar*. Harlow: Longman.  
 Hudson, R. (1998) *English Grammar*. London: Routledge.  
 Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: from intention to articulation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.  
 Lyons, J. (1981). *Language and Linguistics: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Nation, I. S. P., & Macalister, J. (2010). *Language Curriculum Design*. New York: Routledge.  
 Opie, I. & Opie, P. (1951) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. Oxford: Oxford University Press.  
 Opie, I. & Opie, P. (1955) *The Oxford Nursery Rhyme Book*. Oxford: Oxford University Press.  
 Rivers, W. (1968). *Teaching Foreign-Language Skills*. Chicago: The University of Chicago Press.

#### Summary

In this paper we present an interim report on the development of English language teaching program for elementary school teachers, which started in fiscal 2016 and continues into fiscal 2018. The program has two aims: (1) to equip elementary school teachers with the license of teaching English

as a compulsory subject at junior high schools; and (2) to help them to prepare for teaching English as a subject to elementary school students under the recently-revised course of study, which was announced at the end of fiscal 2016.

After giving a brief explanation of the program, we describe the objectives we set in our courses and how we implemented them. Finally, the results

of our teaching are presented and future issues are discussed for the final year of the program.

**Key Words** : Elementary school, English language, Teacher education, Program development

(Received November 27, 2017)